外科醫法

八

和書門
類 四三一三一 號
一三六 函
一〇 架
九 册

内閣文庫
和書
類 四三一三 號
九 册
一六 函
九五 架

内閣文庫
番號 和 43131
册數 9 (8)
函號 195 307

国立公文書館
National Archives of Japan

宮内省書陵部
教部文庫

外科醫法卷八

佐倉　佐藤舜海尚中譯

惡液質論第三編二

黴毒論第二十一

黴毒ハ人體ニ生ル傳染病ナリ。人ヨリ他人ニ傳ワリ流布ル毒ナリ。其ノ傳染ヲ引ク黴毒乃本性ヲ我輩乃全ク知ラザルモノ能ハザル者ナレハ云フ只是ヨリ顯ハル症狀ノ潰瘡燃衝ト其ヨリ

齊家精舍藏

轉化する續症結毒痼疾乃類ノ如ク必死ニ至ラシムル事アル説ニテ黴ナルヲ識別スル乃ち黴の毒ニ殊ニ黴瘡の膿中所謂黴性膿衝ノ如ク物ナリの含めル故ニ他人乃肌ニ其瘡ノ接スル乃ち此毒ノ染ルなり肌ニ薄弱なる所ハ是ノ染やすし其所ニ摩擦し或ニ外皮ニ剥去ルニ接する時ノハ彌〻染やすしとし一人の身ノニも此所ニあり彼所ニ傳ハルことあるなり故ニ多ハ交媾ニ因て傳ル乃ち口脣咽喉ニ黴瘡ニ病める者と交舌ニ接ニ因て傳ハル乳母ニ哺乳ニ因て

赤子ノ傳ハ又母ノ傳ハ産醫産媼ニ治術ニ臨て手指ニ皮の剥ル所あるニ因て傳ハル産婦陰中ニ黴瘡ニ生する時父母ニ因て子ノ傳ハルことなり父ニ其精ニ因し母ハ其液ニ因る（液ハ胎兒ニ養ハ液ニ云又産道ノ黴瘡ニ因る時ニ胎兒ニ觸れて黴毒ノ感ニ因る説）又器物ニ烟管手巾飲器ニ因て傳ハルことあり此ハ器物ニ傳染乃媒となる者なり

黴氣ノ感しなる初徴ニ其毒ニ觸し所ノ潰瘡ノ生する説ニて表ニ出て凡觸し後二三日ニ經て感しする所の表皮赤ニなり熱し癢ニ生し

小肥出来るて其内小澄水を藏む。病者癢さるゝ故
に是を抓破ハけ〳〵るも自ら破れて
潰瘡小變る。是を疳瘡と云。疳瘡を尋常瘡と異な
る所なけれハ、亦た黴瘡乃なるゝ所を診訣を治
らさるなれハけれを昔ハ須劑ハ用ひさるを愈さ
る瘡をハ、皆黴瘡と定めらるゝ。全く然る者
にもあらず。黴瘡といへど須劑を用ひて愈
へるあり。然乃ち清潔なる時を醫方ハ
を借らるして愈ゆるゝなる者なり。只黴瘡を其
大さを比すれを汁を漉出ハを多くて動をす

れハ燃衝増ハあ。速小廣るの性あり。且自然ま
任置時を愈るゝハへとを日ハ延ま須劑を内
外ハあ攻むる時を速小治すを疑へるもあら
ハ。是ハあて愽ま須劑ハ用ひる事も出来ま
らし。黴瘡といへを必ず須類ハ用ひ瘡を生せ
る者小も、亦是をを防止むるなれ。こを正
當ハあと云うるを方也。其を多乃黴瘡須類を
用ひるして治し、亦或を是を用ひて却て瘡ハ惡
しくなれるるあれを黴瘡の真偽乃
辨ハるを昔より難ま事ハて、亦た其正徴ハなれ

へる者ハ、一そなりとなる。近頃リコルト英人黴瘡乃監定しうるを以て憂ひ、おそれ容易に診断せざるむきとて、同志の者乃こうるに昔れ大醫ヨンヒュンテルゥ、曾て行ひける黴瘡中乃膿即ち汞乃他所に種し方を復た試たるに、其種方を披針乃尖に膿汁を取て、おせを病者の腕、又ハ脚の表皮を刺して種うるなり。乃ち黴瘡なれそ種し所初二日乃間ハ纔に赤きのみ。第三日ハ至て微しく起脹し、赤き輪廓を繞らし、第四日第五日ハ至て、小肥ハ變して刺痕乃尖せる所黯色となる。

肥中に含める水そ。初め澄て次第に濁を濃ち膿に似ゑ。中心凹うて恰そ痘乃如し。乃ち輪廓漸ハ減ハ。ハ。ハ。瘡下乃肉そ増硬結ハ。第六日の後に至て、膿凝して痂ハ結ハ。頂を爪斷たる様ハ。其痂そ剥そ自ら落時そ圓瘡に變して、瘡底硬そして豚乃脂肉ハ。瘡縁そ亦硬く帯赤褐色又そ帯赤青色の暈を繞らそハ見て、其兆とせり。

リコルドフリッケ、其他同志乃諸人此術を數多試みて云ハ。そ。黴瘡乃膿汁ハ其初ハ。

他所へ傳ふる乃性なり、次第に其氣漸く薄くなりて、既に二三週を經ては全く失ふと云ふ、蓋し他所へ傳ふる氣乃膿中に失はる間の、永く短きは瘡の性と、治療乃精粗とに係りて同一ならざるし、扨て瘡は清潔に保ち、又燒爛方などにて其本性を打崩しなば、傳氣乃毒彌減じ、ついに滅るへし、

はは此種方を、黴瘡は識別するに必要なる如くに見ゆるなれども、又黴毒は種々なる其毒の蔓延して、全身に染渡らんとする有り

熟考ふべき、危き術ふそあるへし、リコルドハ全身に染渡らむとする毒は防ぐ能はず、種々なる疹乃既に黴毒乃真性を顯はすに至れば、忽ち藥石にて是を猛く燒崩しなば、さなきと燒崩すと雖も已に血中に吸入られたる黴毒をは逐かつ能はず、然はあらば、種々なる所乃潰瘡より痂瘡に至るも愈ゆ、愈る者も醜くなる痕は遺せる様見て、ハムビュルク乃妓そ、プリッケ乃種方を嫌ひて、其所を立退くもなくなるなりと聞く、

又此種方そ、黴毒は診斷するにたりなるとも、

云うそふと行事。何ともなれども。疽瘡の發して暫の間に種さまざまそ種るといへどそ瘡成生せし。已は黴毒乃體水を汚して。全身に染渡る。所謂結毒と云者ふなりてそ。偶傳染ちるとは事て雖そ種る時ふに更ふ感せさるる常ことは也。こそ正しく實驗に據りて證せし所なり。はれそ此種方そ病者ふ利なる。只害めこなれそ。治術に取てそ露程も益あるへふとそ覺ほえし。勉めて行ふへふそそなりさるふなり。ヨ六ヒンテルそはりに意やはふたなりそ。種し事ふ此ことに少なるまけそ。此人

ハ今古稀なる名哲なる成。若勉めて此術成弘めむとそる者なりハ。そそ徒に其細瑾成擧て。大功を覆ふとはを云へけ也。

黴氣を受なる所へ。直に感して生そる黴瘡をハ。疽瘡プリマイヒ、ズ虫ール と云。黴毒は全身に殘る所なき深渡せハ。或そ水梜腫太を生し。或そ咽喉ふ潰瘡成發し。或そ皮膚ふ小疹成顯し。或そ骨質ふ煩衝を致して。黴毒の本性成表ハ。是を結毒セキトセ、シトリと云。リコルドそ結毒を症狀に就て。更ふ二種ふ別て。一を結毒と云一成痼疾と云けそ。

結毒ニテ横痃咽喉瘡ヲ屬ケ、痼疾ニハ皮疹骨病
ヲ屬セシメタルモノトス此辨別ヲ亦穩ナラシム凡
黴毒ヲ受テ瘡ヲ生ズル次第ハ、人ニ同シカラス。
中ニテモ痼疾ノ結毒ハ先ヲ顯サ、又ヲ結毒痼
疾ノ合シテ同時ニ發スルヲアリ。
竊ニ按スルニ結毒痼疾ヲ病症ニヨリテ別ツヘ
カラス病性ニヨリテ別ツヘシ。治術ハ
取テモ反對ノ方ノ應ズルヲアリ。詳ニ
巻末ニ論ス

疳瘡

總テ疳瘡ト稱スル者ニ數種アリテ、各形ヲ異ニ
シ、惟ヲ形狀異ニスルノミナラス、亦從テ互ニ
變證アルナリ。條下ニ別テ左ニ論ス。
第一黴性摩傷。　婦人ヲ陰脣男子ヲ亀頭包皮ノ
表皮剥脱スル者ヲ謂フ。是一ヲ交媾ニ臨ミ其所
ヲ劇シク摩擦シタルニ由ル。一ハ陰中尿道ノ粘膜
焮衝シテ表皮ニ及ヒ、其所ノ剥脱スルニ由
セリ。是ヲ亀頭淋ヲ云フ者ナリ。凡粘
膜ニ近ク所ノ表皮ハ、粘膜ト性ニ同シキ事アル
ヲ、其所焮衝スルヲ其刺戟ニ犯サレテ膿ニ似タ

る粘液を漉出し故に其他の官能を妨げらるゝ
ことゝ雖も外表の顆粒剥落て赤色となり痛
を覺ゆることも肉牙れ出来ることなく又深く浸潤
することなく遂ふに白き皮乃出来て其所を被ひ
又ハ赤き極微乃顆粒出来て被ひ次第に外
に向ひて其色の消失するなり又剥脱したる所へ
真乃黴性小肥乃無數に出来て一面に排列したる
疹様なるに如く見て四圍は腫上せと瘡を
深く侵淫せたる者なり
陰所の皮膚の剥脱したるを觀るに是とも黴毒に

感して生じたるものと云へり其性を論するに甚
疑しき所を多く通例黴毒なりと云てよろ
しかるへきなれ病所を清潔に保ちたるも醫方に
借らずして急に治せんと時に至りて是
を推せと能はざる理あるて此剥脱症の速
に治する者と雖も黴氣なりける絶燃衝の一證
に取うるに事乃ち乃剥脱症の速に治
したるなり續て結毒症乃發するとなれそなる
けれと此症の二三日にして治し瘢痕を遺さ
さる者ハ全く黴毒なりけれと定むるそよろし

第二凸瘡。粘膜ニ近キ所乃表皮、又粘膜ニ交セル所乃表皮ヨリ、殊ニ多ク發セリ。譬ヘバ色皮陰脣等ノ所ノ如シ。此等ノ所ノ肥太ニシテ突出シ、黯赤色ニ變ズル所ノ如キ。此瘡出来ル時、瘡底白ク且ツ海綿ノ如ク、外皮ト平ラナル或ハ外皮ヨリ突出シテ瘡緣增隆起シタル者ナリ。此名ノ如キ起ル所ナリ。凸瘡ハ摩傷ヨリ比スレバ稍、黴毒乃氣ヲ受テ生ズルモノニ云ヘリ。未タ必ズ疑ナシトスベカラズ。然レトモ愈ユルニハ永ク日ヲ費シテ愈ナレ必ス瘢痕ヲ殘ス。稀ニハ淋病表皮乃無花巢瘡ト

ヲ合セテ結毒症ヨリ續發スルモアリ。

第三凹瘡。瘡形圓豆乃如ク深ク侵蝕シ、底ハ硬ク豚乃脂肉ニ似タリ。緣ハ峙ナリテ削ル如ク齊シク、四圍ニ帶青赤色乃暈ヲ繞ラシ、瘡内ヨリ漉出ル汁、黏ニシテ其大サニ適シタルヲ凹瘡ト疑モナシ。黴性ハ、續テ結毒ヲ發スル者多シ。ナリ。ナレトモ尋常乃外傷、又ハ火傷ヨリ來ル者此ニ似タル瘡ヲ發スルモアリ。外傷ヨリ來ル者瘡ハ忽チ愈ユレトモ、凹瘡ハ性頑ナリテ愈ナリ難シ。醫療乃助ナルヲ要シテ、月ヲ重ネテ

い毒自若らして動こうとすれば益て瘡痕を結ぶ雖も痕底に硬結の遺存する間は未全く治しがたきハ云へつらあ動をしれば結毒誘出せハ為其硬結乃解けて後初めて全治と云へるなり。

第四淫瘡。形正しくして瘡ふて速に廣く侵し。深く淫して其所蠶れ蝕らるる形ふ似たるもの故に蠶蝕瘡の異名を出来るなり。瘡底穢れて灰白色帶たる緑色を顯し。瘡緣ハ帶青紫色を彩り痛甚し。數く動脈を破るる甚しく出血して生ず。又更に侵淫せむとする勢ひ養ハむ為ふ。其毒乃一時伏して假りに佳景を顯すもの為り淫瘡と殊に多く發する所男子ハ亀頭婦人ハ小脣陰門乃内面ふあり惡液質殊に多飲ニ依て體質を傷へる者。黴瘡ハ受ハ忽ち此瘡に轉ず。又食料を誤て瘡所を不潔に保ち頂劑の用方的當ならざる時ハ。黴瘡乃輕しも此惡瘡ふ陷るなり。凡此瘡ハ治するに日を延ばすハ治後必ず著るふ瘢痕を殘す。且結毒症を續發する恐鮮からず。

第五壞瘡。是も遥瘡乃轉して此は變もるなり。
はもて瘡底半ハ壞死し。半ハ廣く侵遥して留る
るる者なり。又輕き瘡は羅斯性燃衝ホ襲ひし。
羅斯の勢ひ遠く陰所乃外乃て蔓延るる。一晝夜
乃内は其所黑色の皮に變る剥落ち。瘡面清くれ
るて肉牙を生し治する者あり。おも亦壞死ぶも
云へき。總て壞瘡は病む者も。其勢は猛すの故ホ
大抵も陽莖乃半ハ過ぎるる。頽はて脱つるなり。
はれる結毒もも誘出さる。何ぶなるもハ瘡底乃既
に壞瘡ホ變るても。黴氣は漏出もも雖も。生肉ホ

觸されもなり。但し壞瘡ホ陷るれも前に。黴瘡は
生しれも結毒を誘出もとあるつ。おも其毒乃
直ちに生肉ホ觸はるハなり。專ら壞瘡ホ病源と
なる者も。已に瘡は發たるホ。累ホ飲食を貪る。殊
に酒に耽る。又燃衝症殊に其性は羅斯なる時ホ
是ホ應する方藥を急る。譬ハ吐劑下劑の主治な
るへきなり。傷るる瀕劑は與ふるの如ハ。皆此
壞瘡に陷らしむる。は媒ぶるる者なり。
體内ホ在もを發もる所の異なるホ應して。疳瘡と
亦其形同しきあり。包皮の内面に生ぜる疳瘡ハ。

突起隆起して恰も無花菓乃如く動もすれば皮一面小瘡衝して是を為す剥ぎ蝕ばれ皮只漏るゝ所は膿乃性と病所に生ずる痛乃狀と伴なて瘡の生ずるを推察するに柳色皮乃内面ふゝ癬多く發する者なれども是を誤るべゝ癬を瘡の如く見ゆれども底赤くして無數乃小胞排列して成る瘡堪くして小胞潰えて跡ゝ瘡となれども速に治す多く夏時發し又飲食就節を失せざるに因て起る其上一旦患あれども數〻反復して治りのなし

亀頭の繫帯亦黴瘡を生し易し其性を侵蝕して繫帯に孔を穿ちて治すべきも見えず猶次第に侵蝕して繫帯は盡く潰し又孔を穿たる所より其残片を蝕断して初て愈ゆることなり

尿道より發する黴瘡も多く外口に接して生じ逐に瘡所に硬結を致す若尿道乃深き所に發たる瘡も其所硬くなりて痛むこと血膿を漏すして推察すべし此瘡を侵淫の性ありて動もすれば尿道より系外皮へ瘡口に成通することあり

陽莖陰囊足脚ニ生ずる黴瘡ハ形小瘤ニ似たれ者少くして多し又圓瘡ハ生じて褐色乃痂ありて被ひ瘡内ニ稀膿を充たす者あり痂落ちハ治すれ共更ニ其邊へ同種の瘡を發する者なり

子宮の黴瘡ハ觀宮鏡ハ用ゐ又ハ陰中を射注して洗ひ殘滴を乾撒糸ハて拭去れ後視見て是を識別ス可し

口脣ニ生ずる疳瘡の發し易き者なり形胼胝瘡ニ似たるハ有ル癌瘡と謬る者あり然れとも黴瘡ハ身體の健なるものハ速ニ出来て水挾の速ニ腫脹

しるそのなり癌性ハ體中ニ久しくして恙なきて後ニ瘡ハ發し水挾の腫脹するも家後なれハ此両事を以て此両症ハ識別ス可き時ハ明らかニ判し得つるなり

横痃

疳瘡乃生ずる邊の水挾ハ直ニ其毒ハ傳へて其挾腫脹する者なり是毒の速ニ吸入されて去らざる者なり是を横痃と云凡疳瘡著るし燃衝ハ他事ハ待ずして近き所乃水挾其毒ニ感し腫脹ス然れとも多ハ疳瘡を患る人偶〻

傷の添来る時ふそ横痃ゑ發し易し其外傷ゑは努力身熱又そ瘡所を不潔ゑ保ち又そ瘡所を燒爛し過し或は刺戟ゑはる等乃事共を云水検の曾て毒ゑ動かせしそ者乃今茅ゑる外傷ゑ感ずる時ふそ燃衝ふ轉しそ乃ち横痃ゑ形ゑる也人若疳瘡を患へそ身を安逸ゑ保ち口禁ゑ慎乃へ然ずる時ふそ横痃の出来ぬるゑ甚稀なる者なり。そそ早ゑ茅病院ゑ入て治療ゑ受る者そ横痃の生するゑ少なふそそもゑるへし。されど水検の燃衝ゑ免せゑる病者を亦結毒所謂全身徴

二罹ゑるとゑ。そそ水検ふ著るふ燃衝を起はゑ。せゑそ毒乃そゑ試過ぬそ遂ゑ全身ゑ渉を。て發ゑるそゑ形を。凡疳瘡の生して茅十日ゑ。曾そ頗ゑ横痃を發しやそふ頃ふそ此頃ふそ疳瘡の膿中そそ傳染乃氣れいと多けせは種ゑに感せしめやすし。

曾て徴疹ゑ發するふ。皮膚乃恙なふ所ふ茅。徴毒の吸入すれて横痃を生すゑ有ゑ亦無ゑ。其議の今まそそ猶定ゑはせいと若吸入せゑる毒ゑ身乃染ゑるとゑ。せそ是ゑ茅横痃

の生ずるもの多く糸状をなし、又必ず然るものならず、陽莖乃皺襞の間に生ずる極微瘡の隱れ生じて速に治するものあり、云説を全く棄つむ所なるべし。

陰所の疳瘡より糸生じ横痃ハ、鼠蹊乃腱膜乃表面に羅列なる水核の外層に燃衝を致し、大抵一核に限るなり、陽莖の左側ハ瘡を發すれば、左側ハ鼠蹊核燃衝に伴ふ時常に左側の核同時に燃衝に伴ふも亦なおにならず、左側の疳瘡ハ右側の横痃を患ある者あり糸ならず交叉に伴ふ。水脉乃其毒を傳ふるなり。凡病者一二日

の間、鼠蹊ハ攣痛を覺ゆる後、水核腫脹して是を押ハ痛を覺ゆ、其燃衝の経過ハ同じ様に或ハ速ハ化膿ハ轉じて、其膿を專ら近隣の蜂窠織中に漏出し、或ハ徐々に水核著るゝ腫るゝ様いへども、化膿ハいまだ様の絶えなおなおあり、ハ性の異なるあり、病者の體質に係る、其外ハ當時流行の病性ハ糸ならずなわち或時にハ多くの横痃、悉く化膿し、又或時ハ化膿しなき事あり、昔より糸横痃乃化膿ハ毒とせるゝ所なり、黴毒ハ黴毒乃ちさるを決定めいへり、其

化膿しなんとする見ゆる者をは、真に黴毒なれば、化膿すへきも見えはなる者なれども、真の焮衝性と定めて、是を解散し術を行ひ、化膿すへき見ゆる者なれハ、熟はせて割開し黴毒なれ掃ふもの、と勉たるもの、ハ擾る所なるに似ること、我既に膿毒病編に論して、惡膿乃血中に湿ハ染て其質なれ汚す時ハ、他所に膿瘡の出来て、速に化膿するの性ありと云へる如く、黴毒を亦是に同しくしてはれを動かすなれを化膿すへき見ゆる横痃なれハ、總て黴性と認るを、實に故あるとなり、當に案ずるを云へけ

ばなり、化膿なへき見えはなる勢の失はる横痃なれ、指して真乃焮衝性とはれさんとなれ、無稽の言ふなれば、黴毒を水挾ふ焮衝症なれ露なるなれ顯ハさんとなれ、そなれを通化するなれを觀るハ、弥然らなる能曉るなれ足れんリコルドは種方なれの横痃の膿を取て種ふ試るなれ、横痃の黴毒性ふ由るなれ、由らはるなれを辨するふ要ある一術なれ、亦疳瘡乃膿はなれ、其膿も發はに、但し横痃を開して初て漏るなれ膿を水挾乃

四圍にいる蜂窩織中へ既に漏出し、たる者なれハ、其驗なるなれ、ちせは一両日を出さる内ハ、其筋の實質中ハ、なれ出来る膿ニあらはせハ、他所へ其氣を傳ふるれ功なるなり、

横痃を早時解散せしむる方ハ効を見はる時ハ、其經過慢徐なる者なれ、猶瘡内ハ膿を速ハ釀したる時を、其自ら破るるハ、ハ日ハ延ハ者を、乃ち破るれを絶間なく惡膿ハ漏し、其表皮ハ紫色ハ變を、薄くなるハ壞る、若壞せはハ内ニ巻ハれ、瘡底硬くれ、善ハ肉牙乃生せは

る者なり、又横痃乃瘻瘡ハ變を、諸方ハ向ひ瘻路ハ作る者ハ、殊ハ病者腺病質ハ、又を虚弱なる者ニて、且醫方乃的當せさる時ハ、を瘻瘡ニ變を、やはなり、又化膿しハる横痃の既ハ集せる病院へハ入る時ハ、虚瘡ニ陥を月を彌を、其症動ハる者なり、

黴性横痃ハ鼠蹊ニ生ハる者ハ、意ハ注めて他性ハ系辨を、他性ハ、傷風性横痃乃類ハ、云其外鼠蹊癩、動脉腫、脚ハ單瘡より發る鼠蹊横乃腫脹等ハ系辨ハへなり、又罩丸の鼠蹊乃邊を

ニ留リ居る者あせい、これをも辨ずべし。
口脣乃疳瘡ふも頸挾、乳頭ニ指頭ニ發しる疳
瘡ふハ、腋挾の腫上ニて潰瘡ニなる者也。

黴性咽喉瘡

黴毒の疳瘡ニ似て顯はれる者ハ、立所ニ減せ
る時ハ、消酸銀（毒ニ消滅さする乃類ハ云なり）腐蝕石ニて疳瘡ニ焼壊ち其六週
ヨリ八週ハ經る此後、是日遅ケれども咽喉ニ瘡の出
來る者ハ、こそ正しく全身へ黴毒の深渡ニて、
る一證ふそなれ。此症ハ出來なむとする前
こそ、全身ふ恙ある体覺え、輕ク熱乃發作ある者

なれ、多くハ風邪ふ傷ハ出て是ニ為ニ咽喉ニ焮
衝を發し、それふ誘ハ出てそ、即誘（因）黴性咽喉瘡の
出來たる者なれ。此症ハ外傷乃待て、
初て出來るニ如く、猶此症ふも咽喉乃焮衝（聖京堀性）
てふニ誘因ニなれ、體内ふ潛ム乃黴毒ハ其所
ふ誘出ハなる〳〵、大抵此瘡乃生ける所ハ、吊肉
扁桃挾、軟口蓋喉中の後壁ニそなる〳〵ニ、ハ出ハ
喉瘡ニ診ニふ、吊肉ニ翻回し、それニ深ム所
ニて探ニて、其有否ハ識別ニ難し。
咽喉瘡の形そ、總て初ふ受なる〳〵疳瘡ふ似る者

るあり、はた陰所に摩傷を受たるもの、扁桃挾に浅き白色の靡爛を發し、凹瘡を受たるもの、喉内に凹瘡を發す、淫瘡を受たるもの、痛瘡を發して特に夢延とやなるあり、但し凹瘡と壞瘡とは、喉内に發する成見しるべし、はい云ど又此理をもて推るに能はさる所ありて、異様の瘡は喉内に發するゆえに、蓋し病者の體質に係りて、其人性の變る者ありやあらむ、喉内に轉したる瘡の、疳瘡に相似るゆえに似たるもの、徽毒に種ゝ有まて、皆其性は異なる者にて受て發るものは各

其性に應する異様の瘡乃發する者なりと云、論を出来せるなれはこそ全く據なき説にて、凹瘡を病いる者は其毒を他人に傳ふる時ありて、他人是に應して其毒乃發する時に、摩傷或は淫瘡に變ることなきはは疳瘡と喉瘡とい素より其毒の異なる者にあらしに、只此毒を受る人くは體質に異なるにより、毒に應して動く生機（所謂元拒）カ乃顯るゝに異なる所ありと見えたり、

リコルド曰く、喉瘡に限らず既に全身に深渉るいる毒の結毒となるあ顯せる瘡は其毒成種ゝ

と雖も他所へも感せしめ、はせと偶此毒に感す
るときは、こはもし結毒よりして傳ハるとハ實
に少形うちめを見てそなるへし。
喉瘡ハ患る病者そ頸挾の腫脹するとそ稀なり、
或そ容色灰白となりて、惡液質乃樣を顯し、咳
嗽を憂ひ、鼻孔の塞うるふ苦しきて、聲の變るそ
あるなり。
喉瘡の経過そ甚た異なり、瘡淺きて深き所を
犯さるる者、折うち天氣佳適にて、治療よろしけ
れハ速に治すれとも速に再發しやすくなるなり。四

瘡遥瘡そ蔓延して、扁桃挾吊肉軟口蓋ハ壞ちて
鼻内に及ひ、鼻中是うたより煩衝せしめて、鋤骨
鼻骨を壞ち、其粘膜に潰爛ハ致ひ、うすき漿液出
そ汁そ、鼻内に鬱積ひ、ためれそ臭氣出来て、其臭氣
甚しけれい、所謂黴性惡臭鼻瘡ごいつる者こそ
形りなし、毒に犯されたる朽骨ハ脫去し後そ、惡
臭減するとは雖そ、餘臭ハ黴氣失するれ後に至て
そ猶遺る者なきすそ骨乃朽去て鼻の構へ變こ
いろ小係るなれ、若遥瘡乃口内ハ後壁ハ侵して、
其所深く頽るれそ、其禍を頸椎に及ひて頸椎

病れ為ゝ死する者なわ。若其毒の喉頭ニ及ふ時ハ。聲嗄聲失を誘出し。終ふそ氣管癆ゟ發して死する者なり。

咽喉結毒瘡と誤易む者そ。扁桃挾の真膿瘡。咽喉粘膜燃衝。扁桃挾結節腫等なり。精しく識別ス〳〵。是等ハ其條下ニ於て云へし。

黴性皮病

黴性皮病とハ。結毒の皮膚ふ顯ふなわ。一そ燃衝狀ゟなり。其轉歸ゟなりて顯ハ也。一そ頑肉と。なわ。無花菓狀を顯を疳瘡の皮膚ニ生しゝ時ふそ。其遮邊ゝ猶疳瘡の如ふ形ゟなりて顯ふゝとなるふりそゝ孫と。多ゝそ咽喉ふ感する時と。其感しをゝ後ゟふ。皮膚ゝ出来ふなわ。黴性皮病そ。種〻ゝ。凡他性ニ異れる。徵の監別ゟ。ゝ。すへふ者そ。通して癢ゝ。ゝ。ゝ。銅色の斑を發そ。其斑ゟ發せゝる。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。潰瘡ニ轉しやすふ性ふそゝ。ゝ。ゝ。ゝ。若頭中ふ發すれ。毛脫ふる者なわ。此症の多ゝ發する者を左ふ云へし。

第一黴性斑。急性の者そ。微熱顯ハ也。身の内乃何所ニ。ゝ。ゝ。淺白球帶ふゝ銅色の斑。いゝ。ゝ。

そのゝ出来て密く相集まり恰も連錢のごとく指に
て押せば其色一旦も失せたるが如く直に顯はれ一両日
を經れば黄色或は灰色に變じて然して消失せ
跡形なく遺さゞるなり凡此斑は數〻反復して来
なる者なり其慢性なる者は出来ること徐々にて
殊に額に多く顯はれ銅斑の大さは豆より銀錢乃
大さにして形圓し數年の間消失ることあり其消
ゆる時は鱗屑の如く剥去るなり毛髮は生ず
る所に發ることあり復び生ずることあり
第二黴性鱗屑　多く頭と頸とに發し較節に當

る外皮に毛發なることあり隆起して銅斑なり
多くは樣子大なれども是より漸次大きく
伸びて斑表斑緣鱗屑狀に變じて絶間なく剥落
せども少しづゝ遺る所あり此斑は潰瘡に轉
しやすく轉じて愈て必ず醜痕を遺す
掌に蹠に生ずることあり乃ち鷲掌風
なりと云者少し外表に裂紋を生し其紋間の皮
赤色なるに光澤なるなり裂紋は乾
褐色の鱗屑なる者なり此物の厚さなる
に從ひて裂紋の出来ることなり凡黴性

鱗屑ハ全身徽即ち結毒乃正兆ニあるへし數年の間愈はる者ハ攻擊乃醫方ハならはれを効多取ること

第三小疹　所謂揚梅瘡ニいへる類なる數ヶ發熱腸胃症顯ハれ較節ニ痛を覺え全身ハ銅色ニして尖ること疹の出来る者なり此疹ハ之ハ其内布置はる者なり或ハ團ニ楕圓ニ坐いるもの二累ニ混流ハ之ハ見るにならはれを顆粒を別ちて生はる者なり此疹乃急性なること六日より八日乃經て鱗屑ハ消失せて斑痕を

なを遺はる若慢性なれを顆粒正しく顯はて熱を發せはる治すること徐ろにして必を他の結毒症ハ誘出をさるを徽性鱗屑ハ如ク頑なるものニハならはる

第四徽性小瘡　初を頭ハ發し漸ニ全身ニ及ふ搽子大の瘡ハ尖て頂ハ尖て其尖ること膿を釀すに至て扁平ハ見え乾けて褐色ハ痂ハ結え痂落ハを小痕ハ遺はる或を帶青赤色ハ斑を遺はること此瘡多ク一所愈ハ他所へ發し發はること毒ハ殖を身毛ハ是ニ動ハ也

て衰ふるなり。濕瘡を病むもの人の惡液質いるみるもの者。此小瘡を患ふせる。其性變を潰爛して廣く少く帶黑綠色にして瘡面を被ふ。漸く厚くなり。表皮より來隆起するもの殆むど半寸に至るもの也。此小疹を全身に徹氣に渉るにより生ずるもの明なり。はしは疳瘡を生せしより。二三月にして經て發するもの常にこれ。はしは來を早く疳瘡を生じ。もの近邊へ發するもの又少なしとす。

第五徹性結物。體內何所にまれ。定まるなくして。殊に鼻尖面頰口脣に多く發する紫色の硬き結物なり。豆の大さのごとくなり。鳩卵の大さにて。只表面鱗屑のごとくなりて剥落し。月日重なり歲を越せども自若として動かざる者なり。又潰瘡に陷りて結物頹せず遂に其所の皮膚を壞ぶる者なり。若數多く同時に發するもの時に連續して環輪のごとく或は委蛇たる聯珠のごとく。其間に皮膚を少し患ひ罹らざるなり。此症を正しく結毒の一症となして。出來る者にて病者素より惡液質なれば殊に彌然たり。若募延するもの廣くなりて。これを爲に虛脫に陷る。若此結物の皮裏蜂窩織中に

生じる時ふそ或ハ化膿ふ轉し或そ皮と肉とを離し或そ潰瘡ハ誘来ふ是ふ為に表皮いくつ
ふ潰爛せらるる者なり。

黴性無花菓瘡

表皮の一所黴毒ふ犯されて縱ままに育ちぬ
ハ頑肉出来て無花菓乃形となる總て是を無花
菓瘡と云黴の初度痘瘡ハ痘瘡乃癒
るる後發じる結毒にふ此瘡乃併發そる者そ
なるへし通例此發そる所そ粘膜と表皮と交ハ
る所包皮陰脣肛門なる粘膜乃中層粘液

別ふる小管ハ排列しなせるを云陰道乃内戸ふそ此瘡の伏して
發そるふ至ハ小乃皮裏に發しなる至ハ乃
無花菓瘡ハ股の皮挾中に見出しそりき大さ麦
粒のふ帯白黄色乃結塊ふて凡そ皮挾ふあ
りて絞出しなりふそ無花菓瘡ふそ亦二種な
ふ左ふ別けて云ふ。

第一廣茎無花菓瘡。皮上ふ生そる癒肉ふて灰
白色なる者乃ふ赤色なる者あり攀子大ふあり其
餘ふ至ふ別ふ小發して各一茎ハ具へ項圓ふ者
あり或ハ累ふ連ふ發して瘡脚交ハる者あふ何

之を表面より惡臭ある粘膠なる稀汁を出し、又其表面潰爛して、裂紋を層間に致す者あり。之瘡ハ通例、臀陰、囊陰、脣に發すること多し。此瘡れい〻之蔓延する者も、往々半尺を越え、是より漉出せる汁ハ、傳染の氣を含めるを、たゞし種々傳ハるもれしと云へり。此等れ人と交媾する時、之を同種の瘡出来るなり。此瘡肉ハ化育れ機乃誠に微なる者なれども、口禁れ嚴に慎まざる時ハ、結毒の他症と共に消失するもの少なし。又頑なる者なり。殊に廣之蔓延する者と潰瘡ハ轉

ろ〻る者も、彌治しがたく、猛烈れ藥石を施すも、初て効乃顯るゝ者なり。

第二頂尖無花菓瘡、　皮上に白き小疹、叢簇して生じ、初め莖廣く頂尖なる疣に類すれども、漸く育つに從て、岐を別ち恰も鷄冠のごとくれ、色ハ白きあり赤きあり、頂よりも汁の出るを微けれども、其岐間より多く出るなり。此汁に來て、他人に種せば、其毒に感じて、ざれと傳染の氣なりと云へり。頂尖無花菓瘡も、亦廣莖無花菓瘡の發する所に同じけれども、殊

二包皮ゝ肛門ゝ多ゝ發するなり。さていへば
余ハ一家ゝて四人此瘡ハ口内ハ發ゝるゝ
なり。それ一人ゝ母ゝて。三人ゝ子なりしが
ども舌の全體ゝ頰ハ内面ゝて此無花瘡密ゝ
簇生ゝて。平地少ゝゝ見えるるてハなりに
なり。ハハ他症ハ黴毒なるゝ覺ゝゝ露
ほゝゝ顯ゝさるゝ。こゝ正ゝゝ父ゝ來傳ゝ來
ほる者ハそなるへよ。又亀頭ゝ發する者ハ拳大
ゝ至るゝ見るゝ。ゝゝ抑此種の瘡ゝ前
種の瘡ゝ比ゝゝ化育ハ機頗る盛なるゝ。

著るゝ一夢延る者なり。全身治方乃ゝ。ゝゝ効ハ
收るゝ。

此両種ハ無花菓瘡の頑肉乃織成ゝゝ。尋常ハ蜂
窠織ゝて組成ゝゝる者ゝて。血脉ゝ生ゝ渉るな
ゝ廣筌の瘡ゝゝ其内ゝ膿球の雜ゝるゝ。抑
此瘡の治ゝなるゝ跡ゝ。痕なゝ遺さるゝ奇と
いふへゝ。猶腐蝕劑ゝ用ゐ。或ゝ切斷ゝるゝいへ
ども。遂ゝゝ其所の表皮全ゝ愈ゝて。瘢痕ゝゝ
遺さるゝ。

斯の如ゝ黴性皮病ゝ。種ゝ形ハ異なる者あり。

丁ル黴毒傳染氣ニ異なる本性幾等そなはりて各異成傳ふるゆゑんなり。猶疱瘡の形を異ふして種々に顯るゝゆゑんあるそなるべし。本性そ皆一なりそ。病者の體質に從ひ百器の黴氣ヨ感して動ス。生機の異なるヲ應して或そ小疹と成り或そ小瘡ハ小瘡となり或そ頑肉となるヲ成るへし。けるこよりて一人にて小瘡と頑肉とを併發ることあり。或そ小瘡愈ること後ヨ頑肉乃出來る者ありけれそ又一人にて肛門の邊ふそ廣莖無花菓瘡ヲ發し股と腰ニそ小瘡ヲ發し胸と脚ニて小疹成發ス頸と顔ニて斑ヲ發ること前ニ陰所ヨ生ーーーる一疱瘡よりして其毒の染渉る度の厚薄ヨ從ひ其厚き所へそ頑瘡の出來たる次第ヨ其毒ハ薄ヨ瘡の出來る明證ヨこそなるへけれ。又嘗て黴性小疹成病なる者乃別ニ體格ヨ虛脫さるるこく成合ハそれヨ從て其瘡の結物ヨ變ることあり。こそ亦體格ヨ應して初ふそ異なる形ニ變る者ふそなるべしはそ疱瘡を患てより皮病の出來ある其皮病ふは種々ハ瘡のなりて預め是を識ることそ能はそ皆

黴氣に應ずる各器に性の異なれるによりて示すに顯るゝ瘡おも異なる形を出来たるはもと大抵摩傷を患ゆる者を軽症なる銅斑に小疹と称病に凹瘡を患ゆる者を小瘡を病み遥瘡を患ゆる者を腐肉を生て腐潰瘡に病むを通例の事なり。ゆえに又此例を推せば今のいわゆる九瘡を發せしめ皮病を生ずる間おは體質他事に感せられ從て其質乃變ずるをもせば黴性の續發症卽皮膚に從て異ならざるを能はざるなり。てを怪しむに足らざる

ゆえなり。

黴性骨病

薄肉おて被はせる所の骨を頗る黴性骨煤衝に罹ること甚だ。いまゝ頭骨胸骨鎖骨骺骨は如し。但し痛風傷風を合せる時おを此例をて推ゆるに動をなすを軟節に黴性煤衝を致を抑黴性骨煤衝は骨乃皮質に著ゆゆえに恰も骨衣煤衝に似たる症を發するを頗る多し。黴毒を患ゆる者は偶外傷を受て骨に傷ふ時おを乃ち其外傷誘因となりて黴性骨煤衝を誘出す。又大

長骨腿骨臂骨の類黴毒に感じて、其骨の慢性燋衝を發し、痛劇しく、殊に夜間に堪忍ふべからざるに至るべしと云へり。

本註曰、此痛ある骨燋衝を患ふる病者の訴へを聞く、其痛を骨に内裡にてなりと云骨乃内裡は質ふ所、決して知覺を具へざるの故に、こゝに疑ふべき事に似たれども、近頃余慢性燋衝を骨に病みて、其所の知覺著るしきを見たり、此一證ゝ云へるべき事にて、當時の吾門生も悉く知るべきなるべし、其病者は男子にて、大腿骨は三分の上部へ當るべきの所へ、慢性燋衝を患ひ、從て其所肥太しけれど、前醫士與ふる所の百方効なく、痛次第に堪へがたく、病者自ら思ふに、腿を切斷したらんには、此苦痛をも忘るべしとて、はじめ前醫に商ども、前醫も亦謂らく、苦楚に堪忍もせん日限を定めんと、然るに是が為に諸力は衰ふるを明らかに知る、然らば切斷するにしかず、共に決定して、偖吾術をもて、なるべく切斷方を容易に施すべし術はあらけれども、燋衝のごとき

ニ隆起シテ大腿骨の一所ヲ圓錐ニて穿て
ヒ乃チ硬ニ厚ニ形りなる骨乃皮質ヲ取除ム
シハ其内ニ海綿組織乃知覺ニ充ふて探針
ニて微シニ觸ルモ痛堪ヘ難キ者ハ見出シ
タヒブロヂール是ハ同シク治驗ハ脛骨下部
の骨質内ニ生シタル膿瘡ハ見タリ之皆骨
創ヨリ永ク膿の漏出テ息時なけれそ遂ニ
ハ骨の肥太シタル所モ散ヒて全ク治シテて
なるなる
骨病の急性なる者ハ骨衣燃衝のヒくなりて顯

ハ也痛覺シなりつて骨衣ヒ骨面ヒ此間ニ血
ヲ混ヘタル汁ヲ漏出シ故ニ骨衣放ヒて腫上ヒ
其外面の平なる緊腫ヲ外表ニ突露シ若是ヲ自
然ニ任置ハ化膿ニ轉ヒ病者素ヨリ悪液質なれ
ハ彌化膿ニ轉シやすく其破ヒて口ヨリ探針
ヲ入テ探試ルれヒ骨此外面粗糙ヒなりて骨
ヲ破ヒ是ヲ被ハサル体ヒ云フヘシ黴毒の治方ヨ
リ云フて其圖ニ當ル時ハ第ニ成ヒ果なる朽骨
の或ハ小片ニ碎け或ハ大片ニ離ヒて瘡口ヨリ
漏ヒ其所癒ゆ也ヒて全身乃悪液ハ制治セ法

の時に、朽骨の生骨より離るゝ期なるべし。若
化膿して破せざる時には、骨衣の間に滲たる汁
凝結して、化骨となるべし。獨汁のみならず、
素より化骨せんとて産出せる者あり。此物も骨
の髓中より漏出せる者にて、骨質小同じく骨衣と
骨面の間に留り、初めは軟らかなる海綿のごとな
れども、漸く固まり、遂には象牙に齊しく硬きとな
り、骨面に密著して別つべからず。此を名つけて
黴性骨瘤と云。又一種別に纖維或は羮汁に似骨
衣乃表裏に出来たる骨の肥太ったるものなり。

経過をいさゝか除くして、圓く骨瘤のごとく顯れ、痛
なきものなり。其纖素より生じたる稍硬き者を
ハ纖維性骨瘤といひ、羮汁にて成れる軟らかなる者
をば護謨性骨瘤といふ。其ニ骨瘡骨疽（骨瘡は猶皮肉乃潰
瘡のごとく骨疽は猶皮肉乃壞死のごとし。本書に誤るべからず。）
ごとく、鋤骨鼻骨ならびに小斤骨は、其全體悉く
骨疽に罹ることあり。

嬰兒黴毒

全身の黴毒に染まりたる婦人、懷妊するに大抵其七
月より八月に至りて、死胎を産む。若其胎は死せ

ける時ニて瘦衰つはて老成人たる容貌あるを多
ハ速に死せ若死せさる時ハて二三週の後速に
黴症を發せ夫結毒を患ひたる其婦も此毒に
染ませ免れて産る嬰兒此毒に感しあるを少
らす又夫婦共に黴毒に染るといへとも強實
なる孩兒の産ることを實に少こしとせ其
前後に堕胎し又ハ不具の嬰兒を産ることも
なるへし凡嬰兒の生ること直ちに遺傳の毒
を顯ハす稀ニて大抵一月餘を経て後皮斑
小疹小瘡ハ發する或ハ常に或ハ肛門の邊に

凹瘡に似て瘡底の硬うしてる者を發し
或ハ脣舌軟口蓋喉内に淺瘡ハ發し啼聲ハ嗄い
る又ハ啞ハ或ハ鼻孔の塞うせる又ハ
これ粘液を漉出して鼻ハ下ハ摩爛し或ハ
較節内面に當る皮膚乃剥脱し又ハ裂紋を生し
水核腫脹ハ化膿せ容易に化膿せ種々
乃症共を發するハ皆攻擊の醫方ハて是に應す
るハ虚脱し又ハ下利して死ハ
る有り
嬰兒産門を出るの時其道路に黴瘡生しあて

せて觸れば、即ち感じて遺傳の毒なれば、早く黴症顯れ、鼻骨に潰瘡の出來て、遂に皮病を併發する者なり、

黴毒合併病

黴毒は、頗る腺病と合併を為すこと多し、其生じやすく生じ難いと雖も、痛なきものなり、疳瘡を頑に抵抗して、治し難く、結毒と形を為すもの、即全身黴瘡潰劑應せざるもの、これを強治すれば、却て害を招く、沃鹼鹽酸亞鉛撒爾撒巴里爾を用ひて、全功を修むべき者なり、痛風を合併するは、較節に病ひを致す、又四肢に裂ること如き痛を生じ、ときに痛風に類するもの、陰伏黴毒に疑ひ、多くは痛風を合併し、多き症にて、冒寒に乘じて疳瘡を横痃に誘出し、結毒を骨衣煥衝と、虹彩煥衝と誘出し、若粗惡に食事のこと、畢濕の地に永住し、又頑類を漫に連服する時、壞血病を併發し、鹽類の下劑を恣用する時も、然る事あり、若畢濕の地に居て、鹽藏の物を食し、不潔に保ちめば、癬を合せ來たりて、樹皮狀の瘡に變ず、

黴毒吉凶論

總て黴毒を以て恐るべよ病とするは一度黴毒に感じ初めたる人は軽症なるとも老年に及ひて再發せしとき云うまけれをなり凡疳瘡は吉凶に論じるに一も其瘡乃形に係はる一も病者の體質小關するを後事を預め定むべし形を以て論する時は淫瘡潰瘡尤も凶とす。體質を以て論する時は他病を合するの者を吉とす。他病に合する者は恐るべきの肺病に罹する時黴毒を受ける一目して危うし

へる事いまだ捨去らざる也病者の諸力盛んなるよ之構生に守る人を凶なるへと見えたる病を意外の吉に轉ずる也幾多の病者疳瘡に罹する時容易に心得安まる構生を破る醫士の命に背きて方藥を怠るは遂に全身に其毒の循ふて結毒に陥る生涯を誤るに至るは豈懼ざけるへやもや。

咽喉結毒に發し又は皮膚結毒に顯るる間に疳瘡より治しやすきは危うしとえいふへからず。はなはだ其毒の既に骨に及ぶて深渉して骨

質を結毒を生じるに至りて攻擊は醫方よりは
はなはだ健康を復し難きこと多くは鼻柱
失ひ軟口蓋を亡ふに至りて凶を定むべし鼻
乃傷らるゝに至りて病者醫治慎まざるべ
守るべ醫方も其度を適られて腐なる骨片乃脱出
して瘡痕を結ひ鼻陷りて醜けるに失ふに至ら
ざる者少き若黴性惡臭鼻瘡を遺せば病者は懇
諭し言へ若是を捨置時は鼻柱失ひ口蓋を
失ふに及ぶなるべし然れば醫方を慎み守りて
後悔のなからむことを願はるべし

余數多は疳瘡治診ずるに本文に以へる正しき
瘡形を發するは甚少なし之を全く吾國の
俗乃弊なり疳瘡を發ぜざるは忽ち膏藥を貼し
又は粗暴に處置するよりは變る者ごとはい
ひながら亦生機の此毒は應ずるカに異なる
所あるを事を以を雲氏（雲埃爾利弗略して今雲氏云以下同）著したる書中黴を論ずるも詳
感ずる所鮮からず素より體裁此書は異なれ
ハ說ふ所を隨て異ならざるを能はず其治効
に求て裨益なるべしと思ふ所なり其意を寫

なして爰に著す。此書は見る人をして雲氏曰、黴瘡は病ひそ自發傳染遺傳の三別あり。其自發とは自ら病出るなり。此毒の初て人に發せしを云ふ更なり。今に至ては自發の疹なしとすへし。こは全く明らかなる事なれ共、表皮粘膜に生じたる瘡の黴に同じく産物膿即汁の類の乃出来て他所へも傳ひうつるなり。亦無くして為へしうつるなり。余初は其説を疑へれいまは決して黴氣なき女子と交接して摩傷を受なきに其所を洗もせず不潔に保ち酒に

耽り肉に貪せる嫖客の遂に黴瘡に變じて結毒を誘出せるとあるを余親しく驗せし所あり。我はこれを人々に定めて實驗せし所にそはらむ。乃ち摩傷に應ずる生機の偶他事に耽飲貪肉感傷せしめて其所に系漏出しはる汁の黴毒を化成せしへはは雲氏の疳瘡の形を以て縄に浅瘡凹瘡凹瘡の三種はあり別に淫瘡壞瘡なる體質に不虞の事とよりて疳瘡に應する生機の變はもて成果はるなるもて疳瘡に應じ

る生機の變換によりて瘡形の如きものゆえなり
第一に多血質にして血行の速なる者又
は病所へ血の多く積せる者又は酒肉を貪ま
まる者に瘡形忽に變じて瘡邊羅斯を發し熱
衝症顯はして瘡内へ汁の漉出ること夥しく猶口
禁を慎まざれば壞瘡に陥ること第二に神經
の感傷に應じて瘡形變じ瘡の知覺非常に亢
ふじて痛劇しく微に觸れるに堪へず
腐藥にて堪さるなり第三に身體虛弱にして
疳瘡一變して瘡緣脆くして弛み瘡底にて

腐肉の粘著して愈れども樣もなく又廣くして
禁えざる第四に腸胃症（一名粘膜血積症）に應じて瘡
形一變して瘡邊羅斯の如く赤き暈代繞らし動
えざるに壞死に陥ることあり瘡緣或は脆く或
は知覺なく或は膨腫して繩の事なども血の
出ることあり瘡内の産物忽に萎びて瘡底帶黃
色又は灰白色の脂に似たる汚垢を覆い恰
も瘡面に苔を生じたる如くに見ゆるのゆえ
に今竊に譯して苔瘡と云苔瘡原名ヂフテリ
チセ、ズウェール、ヂフテリとは咽喉惡瘡の義な

て、苦のみなる樣に相似たるこよりて、其義
は採用するなるべし。其腸胃症の正しき顯せ
りて、生ずる此瘡は、吾國に頗る多く見る所
なるあるべけれど、第五に飲食よりしるしたる所
よりして、身の惡液質となりたる者、殊に酒毒
に中たる者は、疳瘡は得て深く侵淫し、
皮の内裏に至り、瘡緣と瘡邊とに殷赤或は灰白帶
赤色のさまなし。瘡面には苦味を汚垢と
なる。其間は弛緩にして、ふくれる症に亦療方に應せ
ざる食物を貪り食ひ、又は瀉劑を誤用するに

よりて生ずるなり。第六に腺病質にて皮病
を患ふる者は、疳瘡を受けては其性の變ずるを、愈
なるもいとする樣なれども、益蔓延らん勢乃顯
なるべし。又瘡の一方に愈ゆれども他方に絶えず
廣がる者なり。瘡緣或は赤く或は腫れ、瘡底に
時として痂を結ぶ者なり。第七に結毒を患
ふるもの者の、再び疳瘡を患ふる時ふるも、瘡底瘡緣
或は瘡邊も、共に硬結し、甚しきに至りては、軟骨
狀に變ずる者なり。以上七種は皆體質と、不實の
事とに應じて、瘡の性の變ずる者なれば、其に

のを治せんとして瘡のみ愈へふ理なからんやと。
ちうるまうるまうるまうる意を用ひひらひらと瘡
愈はむとして。漫に刺戟の外藥を施し。又妄に須
類沃顛の如き劑を内服せしめ却て險地に
陷らしむる者多し。余り特に悲しむ所なり。
疳瘡を患ふる時に當りて或は淋疾龜頭淋の
類を合そうとなり。こそ無症とうそ云へけれ。
真に黴毒とそいひうるまあるそそ次卷の
末に詳に云へり。黴毒は全身に渉るれむとす
る時ふそ。水核の其毒を吸ふそ横痃となれる

ものと。既に全身に渉るそそ。其標兆とする所
て。病症の顯るる所そ。乃ち結毒といふて皮膚
粘膜口内鼻内虹彩内外の両聽道に亦あり
也。そそ本篇に精しけれそ省ふ法。爰にそ只結
毒瘡といへる者はそ云へ。こそ結毒病の
中に就て。多く發する一症ふるなりける。抑結
毒乃一症。自ら瘡に變る者あり。又攝生を破る
治方其圖に當らそる時にも。此瘡に轉そる
也。此瘡の他事を待そ。直に發そる者そ。初
め皮膚粘膜に血積を致し。其所絶えに犯さる

る時そ、潰爛して遂に實質の深き所をそこなふ。又外傷に乗じて起る。又皮膚に病そる所あるそ、粘膜もしくは物なとを発しいろる所を云に變る。はるそ犯さるゝと絶間なけれは、ますます乗じて其所へ潰瘡は出来る者なり。早くさるゝる所にるゝらるるたゝに犯されて其邊へそ彌潰瘡出来るゝそれなり。硬痂又そ自ら軟化したる産物。黴毒結物又そ硬き胼胝肉なとそ是のみあるも潰瘡を誘出さるゝ足るあへす。凡軟ふして血脉に冒さる所へそ潰瘡生し易し。

はるそ粘膜そ云そ更なり。皮膚ふてそ汗の蒸出る所。谷沁物の流著る所。両肌の相接合ふ所ハ。常に肌の軟らふるそ是に罹るやすし。中ニも陰所婦人陰道そ口脣舌上軟口蓋硬口蓋扁桃挾。鼠の粘膜眼の内眥。喉頭肛門指間。婦人の乳房と。内股ニ多く發るなり。はそいへさ又體中何所ふるれ。是を免るゝ所そ一所そなる事なし。結毒の内ふるそ形の種るに顯はるるハ。此潰瘡ニ為そなし。そハ病毒の根著なる所の異なるニ從ふ。是を誘出さる事共に後ひ病

所の鋭鈍に従ひ。偶々添来る感傷に従いて。毎ニ
形の變ずハなりあ。其の形も變じやすけれバ毎
疳瘡ニ顯ぜはる形に。略似たれど實に疳瘡と
結毒瘡とは間に別ちありて。うつりなれ。陰所口内
ニ發するを專ら云ふなり 結毒瘡に就て其上結毒瘡そ。尋常の
軽き潰爛瘡ニ似たる形に崇まして。海綿瘡
侵蝕瘡に類する形をそなし。甚しけれバ癌瘡
にすりひやれぬ形あれて。顯せざりがら監定よ
るそ彌難きなむあるとなる。只結毒瘡にも是は
攷むるに奇石 須類 沃顛 をもてよからん其功績の著

るき顯はれて。尋常瘡には比ふべくもあらざる
なれバ。其結毒より起る形定むるれバ。志
らいへと結毒瘡とて。正徴とはいふ事しなけ
れバ。他瘡と紛らはしきなれバ苟め
なりも實にもと覺しき徴の。必それなりとも
ならバ。おそて監定をなすべきなれバ。それ
潰瘡の生ずる時にて。一箇ならバ多くハ數
箇同時に發して。瘡の周りまで腫上りて。凝りて固
くなる性あるも。瘡は圍みて銅色の暈あらず。動もえ
ば痂を結ひやすく。瘡底には苔状生じ。廣

かたもやはれ、又深くなりわやもすれば、ときて愈なれど
いたる性を頗る甚しくして、愈ぬれば復ひ破れる
もの、又その他所へ移りやはれ、愈し跡にて線紋
狀なして、硬き異樣の痕を遺し、結毒瘡を體
内に伏いうまれ、生せざる所をなけれども、於
ものを眼の内皆、鼻翅前頭脣邊頭髮所、兩臂指頭
陰所、其邊近 趾間臀邊粘膜の内ふてをの口蓋扁桃 挾舌上喉ぬ後壁等なり
なるもの生ずれば軽しきにあらず、殊に外傷に乘
して生ずるにあらずして、内裏より自ら起き
る者を彌懼るべし、是等狀治するふを、内藥

ハ本篇の方ふ從ふべし、余が一婦人の口吻に
生ずる結物ぬ、軟化せしめ轉ずる潰瘡の
蔓延ずるに口を半ハ過ぎて壞し、鼻を繞りて眼
下に至り、容色奇怪なる者に、沃鹽一日
に一匁より、一匁半を服せしめて、奇驗を得たり
ふ、愛ふ外藥ぬ、其性に應せざるを記すべし、以ぬ
つを主とすべし、次ふ刺戟物を避べし、咽喉結毒瘡なる
ぬハ苛烈の飲食ど烟草ど禁ずるが如し、其餘を緩待方を以て應し、
只内藥の力を助ずるぬを足すべし、

刺衝性、出血性、疼痛性の瘡ふそ、寒罷方を行ひ、失鳩答阿斤液なとを以て塗るつ、慢性の瘡ニて收斂水にて常ふ濕をへし、又消酸銀にて軽く撫るもよし、疳瘡ふ似る皮裏ヲそへ及ひぬる瘡ニて、收斂劑香竄酒腐蝕藥を行ふへし、痂を結へる瘡ふて温湯ヲて濕して、是を軟らけ去るそ、瘡面ふは腐蝕藥を揉るつ、癬狀をなへる瘡ふそ、植物の收斂劑を行ふ、是等ふ無ふて、温浴硫黄浴、外潮浴を日々ふ幾度いらなく行ふへし、又頑瘡ふて其性の何るそれ、

列氏の三十度より、三十五度なる乾温、我國は温石此類ら永く用ひて良効ありとす重疳瘡を得たるとき、半年より一年餘を経て、微氣の復ひ動出るとき、早ち結毒と齊しく發し、大抵半年以上ニて前出るる常ふそ結毒ニ比るそれ、其性頑ニして治方を亦異なる所あるそ、自ら其種屬は別ちたるそ、痼疾ニ云へるそ、痼疾を不圖發るとあるとき、冒寒骨傷なとに誘ひて顯る、亦少からす、又結毒の家後ニ顯る、虹彩炎衝、鼻瘡喉瘡喉頭瘡、耳聾痂を結へる頑瘡、

癌性ハ似たる瘡なれども、合併一来たることあり。
はたまハ是等ハ結毒瘡ヨリ痼疾ヲ轉シ出ス
媒症と云ヒ、宜なるかな、痼疾ニ属スル常一症
ヨリ、睪丸の腫脹ハ、あるなり。本篇睪丸燃衝ヲ各論中ニ論ス
へしと註し、めたるなり。各論中此篇なし
ようて、是を補ふ。打撲壓迫
又ハ淫情の過激ニ、又ハ淋疾等の刺戟ニ
よりて、又ハ是ハ覺しき事なくして、夜間睪丸ハ多
ハ所丸なり、両丸齊しくして痛ヲ覺ス、其痛腰邊
病者ハ甚ダ稀なり、
ニ延ス、痛の微なる者あり。今睪丸の一所、若ハ數所腫
大して、遂ハ其全體硬ニなり、平常ニ比して三

四倍になる、猶其餘ニも至る者あるとぢたと押
とも痛ヲ覺ス、副睪病ヲ免ル陰嚢ハ常ニ異
なることなく、丸ハ放る精液の製造妨け
られ、病進んで重ければ、全ク製ることあたハず
ニ膨大し、一二月より一年の久しきを
経て、病其極ニ至れば、遂ニ自ら治して舊の姿
ニ復る者なれども、此症の再三反復し来て
ハ、遂ハ睪丸萎ミて豆大ニ至る者あり、又
睪丸稜角ヲなして、軟骨状ニ變る者あり、又睪
丸ハ膿を釀して破れ、其實質溶けて悪膿ヒれ

東京大学総合図書館蔵

骨流出て〻其餘れる所を萎縮して治する者あるを。其次を皮裏蜂窩織粘膜裏蜂窩織等に發する護謨腫。筋縮骨病骨病を本篇に各論篇に詳らに論じ入れを麦〻内臓病神経感傷等なり此よりして終に黴性惡液質に至りて生涯治をつらぬる病となる。其毒の殘酷なるを豈懼せざるへけむや筋縮とを多く屈筋に毒の着なる者ふて初傷風性れ痛あるを夜間殊に甚しく則ち腕の曲るを限はなを獨腕ふめ〻ならざる腱衣及ふ其近邊の皮膚に障をなるふあらざる内臓に

黴毒痼疾の轉ずるとあれを其肺に著なるを肺勞を生し脾腎に著なるを豚脂肉狀に其質を變ず若神経感傷せらるれを神経に體損あるをいふ所謂黴性癰病と云者を病うて憂悶を顯し〻黴氣に染たる憶念息む時なく鼻中靡爛咽喉血積粘液漏出なれ病となるを〻ふ〻〻〻ふるを〻ふ〻〻〻患ひてばうるまも忘れるを〻鼻や脱ちを〻喉や壞れを〻むと自ら憂ひ迎へて病のかを重ねるを覺ゆるなり〻れを結毒と痼疾とを其源を

一なれども別して両流とする者自ら異なれども者となれる者多し然れども治方を從て同しうるへきに結毒の治方を本篇に詳に出ハ〻ふて痼疾ニはまてはなる云説し凡黴毒を得たる者の痼疾とならんとする事を豫めて慥に防止むる方を未た曾て聞ふ痼疾を數年の間體内に潛ませて此患を免れ〻と思ふに俄に此事に誘ハれて起ることなれて是を預め防ぐむを彌かるなんあるへし只纔に誘出はんとする事共を

ハ防得へしのくはしくして結毒を患たる人〻ハ生涯慎みて自ら萬事に應ずれて其痼疾を免〻事ハ難しよ〻ハ〻ふて諸力を惜みて使ふ物に勉強をへきに又痼疾の宿るれむと為る所をかくそのに守るなれ事なれ人〻て殊に身を冷やし情慾を忘る動〻酒類を濫用に過ぎ筋肉体縱に勞し食料に〻ふしてて不潔に身を保ちめるて皆痼疾を誘出はん媒となる事なれて嚴に禁をへき事にるなれけ又痼疾の宿るめへに所に

聊の感傷なりとて出来たれも別て意を注め
て是を制治せるべし。譬ハ淋病睾丸痛傷風
痛風骨折骨は感觸非常に尤も多き者なり皮膚粘膜の感傷間歇
熱と病源の指さへ所見なくして容易に病
なる所なる者等にて意を注めて既に痼疾症
に合せ来ぬるものは。ものらさるものを診決せ
るそよき。則ち是等を防き止るそ所謂痼疾を
誘出さんとする事なれ防ぐを得へきに緊要なる
ものなれ。痼疾症の既に顯はれるもの
體格を專ら強壯ならしめ諸力を故復せしむ

るの方法を主とすべし。ちそ要あるとなり。其理
なるもの盡しるもの妙効のなるを知る。體質を
強免滋味乃食餌を與ふるそ痼疾に通して害
なし。却て益なる者そなり。ちそ結毒にそ下
劑を行ひ食餌を節なるを通法とすなり。
なるそ止む事を得ぬるの外そ是等ハ禁して
結毒ハ害なるそ。其症狀動出ちる方ハ。保固
強壯劑を行ふ時ハそ。顯はるる症をそ制し其
顯はるるとなる症をハ防止るなる是余か結毒
と痼疾乃性そ正しく相異なる所まるなり

と云所以なり。其外ハ方藥を通用して、かつこ
こそ此方の以て効あるこゝ、こゝ二ヶ所此藥ハ頗
る績ありと云ふ。權ハ應用さるる乃ち凡
痼疾症を制するの主たる者ハ、沃顛ふそなる
へし。體質未た甚を衰へず、其症未た甚しく劇し
からざるに、此石ハ頃ハ効を奏さるを
し者ハ、そ彌驗乃著るゝ者なり。就中沃鹽ヲ水
劑ヨ製し、一日ヨ半ヲよりハ乃を用ゐるへし、
若此劑の胃ニ堪うぬる者ニハ、希竄水又ハ阿
片を合せて與ふへし。又實ニ堪さる者ハ、両

三日の間止めて、其後復た試むへし。たゝる時
ハ、炭酸、乳汁食鹽ヲ合そる代ヨリ、そ若衰
弱せる者、又ハ頑固なる者ニハ、沃銭二氏よりも
五氏を、一日乃量と定め、是を單用し、或ハ沃鹽
を兼用して、大効ある、又沃顛浴も効あるなり
是を兼用して、内服の沃頑の効を助ケ、頑類
亦効なしと云へ、こゝあ、或ハ欠へからさる
品となるなり。然ハ其ハ総て結毒よりして其
効の劣れる者ニして、たゝれこなれば、病者
の體質既ニ衰たるを、是代用ふる時ハ、益衰

へて再ゝ其力復すゝそ思ハせさる程ニ成
果さゝ害あるゝ故ニ劑を用ゐへき法
そ強實の人ハ痼疾症を以て早ゝよりあ生し
其症頑なる者ハ骨衣骨質ハ病又ハ沃顛
ハ用ゐるゝ其驗見らるゝ者乃為にそ主
治とす消酸も又痼疾ハ効あるも其他鑛屬
も用ゐるとハ雖殊ハ錢劑ハ沃顛ハ合せ用
ゐて痼疾のゝ元ハ弱ゝる百體を補ひ効
なるゝ草根の制黴藥撒爾撒巴利児刺癒瘡木幾
那等の煎湯も亦痼疾ニ要あり或ハ沃頭の力

ハ助ケ或ハ沃鹽ニ堪さる者或ハ沃頭と交ハ
ふゝ用ゐて効あるゝ就中悉多満煎ラフヘクテ
ウル乃舎利別を用ゐるゝ是等ハ皆黴毒の
妙藥とそいふへし此外ニ苦味藥強壮藥も棄
へからさるゝ顯せるゝ危急症を洗うせ又ハ
妙藥を用ゐれも前ニ預め用ゐて調理そるゝ
ゝ故ハ沃頭の痼疾の劇痛を鎮め下利を
飲ゝ臨眠を促ゝ以て第一の主治とす
是ニ次てハ失鳩荅菲沃斯なるゝ鎮痙藥益に
ゝなるゝ水も単用し泉水井水の清き者或ハ食鹽錢礦黄

等を微し和し用ひて痼疾を治するの奇効あり但し一時に多量を益なし量を定めて永く用ひるふべらさるを効を見ん温湯を内外共に用ひるも亦効あるべし脱力して衰弱しる人に用ひるべし寒水を衰弱せさる人に用ひるべし食料を結毒に異なり滋養物を専らとすべし乳汁嫩肉及易化の菓實殊に蒲萄此如きを薬石の力を助るものなれば又薬石を用ひる時も必ず代るを専ら効を奏するとあり病室を常に暖にしべきと

暖に少くとも空氣を換さる時ハ其害も甚し以上記しる所を痼疾とのみ顯せしる諸症小通用をへよ方法をなるけれ其症に顯せなる所に應して各外用を要をへし其畢九に顯せる時ハ畢九を編帯に維持しるを怠るへからあ余を畢九を綿ふて包こ我國の特産禪にて是を為ると緊めはしるこをなかしこよ多ハれと思ふ綿にて包めて温氣を蓄へて弱をる機を奮發さるの効あるべし或を初より来失鳩答硬膏を

用ゐるべし。總て硬膏を用ゐるゆゑ、これを布
片に攤し、其布片をゆゑ細長に裁ちて、これを
陰嚢を雌羽の狀に纏絡ゐるなり。若水疝を兼
たるゆゑ、刺して其水を瀉ゆべし。此症の早く
よわ顯はるゆゑ潰類を試ゐ、晩き者には沃鹼を
よりて、リコルドを沃潰と伏合用せり。若
膿潰ゐるゆゑ膿路の彎曲せる者なゆ、膿瘡の治
法に倣ひて療ゆべし。護謨腫の全身治方にて
治せば、却て化膿に轉ずる者ゐるゆゑ、ゆゑ先
菁膏を貼して外表を剥ぎ、其跡へ外潰の濃水

を貼して破るべし。若潰瘡ゆ轉ゐゆゑ淡き沃
顛酒或揉を効あり、其餘ゆ潰瘡の治方に從
ふべし。筋縮は沃鹼或内服せしを兼て潰膏を
揉ぜば從て治す。溫治或行へゆゑ其効を助く。衰
弱ゆる者ゆゑ沃錢大効ゐるなり。骨痛ゆは初
め矢鳩答硬膏、阿片硬膏を貼ゐへく、發泡膏或
貼して其跡を阿片膏に換貼すれば痛著るべ
去るべし。ゆゑ姑息乃ち方なれば數く
反復し行ふべきゆゑ、兼て阿片を内服効
あり。凡骨病ゆ力ゐる制儆方にあらはれゆゑ治

しかるに此中に潰劑を用ゐさる者には潰劑を試み次て悉多満煎沃顛等を行ふべし骨衣骨質より産物の出来なば是に應する外方を行ふべし徽性とは別に異なる療方の行ふべあらば只多量に瀉血を禁ずるに異なるべし病疾の内臓より轉じて骨に治方にあるべしそもそも只肝臓より轉じて其炊衝の出来るには水蛭阿片浴方を行ひ直に沃顛を用ゐれば異なるべし神経症に荒蕪滲出物等の為より其機の感通妨げらるるべし外に沃顛亦

奇効あり沃顛の外小に分泌を進むる藥方譬へば巣實療方含鹽温泉浴の類又は寒水飲を永久連用して効あり又其人の體格に應する温泉浴を行へば藥力を助ける一方なるべし所謂徽性惡液質には沃鐵を内服させ初めて美食させて適度の攝生方譬へば體を温護して強壮浴のごとを行ふを主治とすべし

外科醫法卷八終

内閣文庫

内閣文庫所藏

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan